

プラテュス *πλατύς*



◆巻頭言	保健科学研究所の建物小史……………	1
	保健科学研究所 副研究院長 齋藤 健	
◆北大を離れるにあたって～ご挨拶	……………	2
	機能回復学分野 特任教授 福島 順子	
	健康科学分野 特任教授 酒井 正春	
	創成看護学分野 教授 河原田 まり子	
	機能回復学分野 教授 武田 直樹	
◆新任教員紹介	ご挨拶……………	6
	基盤看護学分野 助教 吉田 祐子	
◆研究室紹介	健康科学分野 人類生態学研究室……………	7
	健康科学分野 准教授 山内 太郎	
◆サステナビリティ・ウィーク報告		
	SW2012学生研究ポスターコンテスト受賞報告……………	8
	保健科学コース 修士課程1年 満永 有美	
	看護学コース 修士課程2年 齋藤 彩乃	
◆国際交流協定締結の報告		
	インドネシア Diponegoro大学およびDr. Kariadi病院と部局間交流協定を締結……………	9
	保健科学研究所 国際交流専門部会長 山内 太郎	
	台北医学大学と部局間交流協定を締結……………	9
	保健科学研究所 研究院長 伊達 広行	
◆大学院連携分野設置の報告		
	独立行政法人放射線医学総合研究所と大学院連携協定を締結……………	10
	健康科学分野 教授 小笠原 克彦	
	(連携分野)重粒子医科学分野・客員教授 安藤 裕	
◆高校生対象体験プログラム報告		
	ひらめき☆ときめきサイエンス～ようこそ大学の研究室へ～……………	11
	病態解析学分野 教授 山口 博之	
◆報告事項	……………	12

保健科学研究所の建物小史

保健科学研究所 副研究院長 齋藤 健



保健科学研究所・保健科学院/保健学科(以下、本研究所と略す)の建物の改修および新築工事が始まった。しかも同時期に。現在、本研究所の建物は、A,B,CおよびD棟と呼ばれる4棟から成り立っている。今度新築される棟はE棟と呼ばれことになる。このアルファベットは何を

あらわしているのか?おそらく建築された順番だろうと漠然と考えてきた(というより、建物の中で暮らしてみてもう感じていた)。本当にそうなのか、この機会に本研究所の建築物の歴史を自分なりに調べてみることにして、北大125年史や北大医学部90年史等を図書館で紐解いてみた。C棟とD棟(写真1)についてわかったことを先に述べる。1981年3月5日「医療技術短期大学部2,113m²の新築工事が落成した」とある。これがC棟に該当する。続いて1982年3月18日「医療技術短期大学部2,900m²の新築工事が落成した」とあるのがD棟である。が、『2,900m²は小さすぎないか?D棟はC棟の倍以上あるはず』とC棟の住人である私は疑問に思った。すると1985年3月27日「医療技術短期大学部1,647m²の増築工事が落成した」とある。かなりの増築面積である。驚いたことに(この頃からおられるあるいはおられた教職員の方には自明のことなのですが)、D棟の中央近くにある階段より西部分、D棟のかなりの部分はその時増築されていることがわかった。さてA棟とB棟(写真2)のことである。C棟やD棟とは異なり、上述の歴史資料の年表内には、A棟とB棟の落成した時期の記載は見当たらなかった。しかし、写真集北大125年の中に、1971年12月「医学部附属看護学校新築」という記載と共にA棟・B棟の写真があった。両棟はこの時期に同時に落成したと考えてよいだろう。その後C棟の工事と同時期の1981年3月にA棟の1階西端部分の増築が行われたこともわかった。

本研究所の建物の新築・増築の時期と本研究所の



■写真1 C棟(左)D棟(右)改修前、最後の冬の風景(2013年2月撮影)

沿革との関連を追ってみると、1971年のA棟・B棟新築の翌年1972年に、看護・助産婦・診療放射線技師・臨床検査技師学校がA棟・B棟に移転している。1981年のC棟新築の前年1980年10月に北大に医療技術短期大学部が併設、看護学科が設置され、C棟新築のあった1981年の4月には理学療法学科と作業療法学科が設置され、さらに、D棟新築のあった1982年の4月には衛生技術学科が設置された。さらに、D棟増築の前年1984年の4月には診療放射線技術学科が設置され、D棟増築のあった1985年の4月には専攻科助産学特別専攻が設置された。つまりそこには、教職員や学生を受け入れる建物の準備が整ってから、新制度がスタートするという極めて自然な流れがあったことがわかる。しかし、その後はこれまでと大きく異なっていた。2003年10月に医学部保健学科(4年制)が設置されて学生定員が約200名増えても、2008年4月に保健科学研究所および保健科学院修士課程が、さらに2010年4月に保健科学院博士後期課程が設置されて、教育研究目標が保健科学研究の世界的拠点の形成およびそれを担う若手研究教育者の育成に重点が移り、そのための研究スペースの確保が最優先課題となっても、一切建物の新築・増築はなかった。その間、医療技術短期大学部の主に教育を中心として建築された建物の限られたスペースの中で、共同研究スペースを拡充し、大学院生の居場所や講義室、学生の講義・実習室を確保してきた。それは、教職員の教育研究に対する情熱や院生・学生の理解があって初めて可能となる極めて困難な施設環境であったと思う。例えば、ここ3年程、会議室と呼べる部屋は教授会の行われる部屋1室のみとなっていた。

ここにきて、本研究所の建築物史として新たに大きな出来事が加わることになる。新棟(E棟)の建築とA,B,CおよびD棟の改修が立て続けに決定した。現在のところ、2014年1月には研究棟としての機能を担うE棟の新築が、2014年3月にはA,BおよびC棟の改修が、同年9月にはD棟の改修が完成する予定である。『そして次は?201X年のE棟の増築か、F棟の新築?』



■写真2 A棟(左)B棟(右)(2013年2月撮影)

ご挨拶

機能回復学分野・特任教授 福島 順子

私は、本来は平成24年3月に定年を迎え退職の予定でしたが、特任教授としての延長制度を利用させていただいて、25年3月で退職ということになります。北大に勤務して25年、長いようであると言う間だったような気がしております。その間、多くの教職員の皆様にお世話になりました。

最初は医療技術短大部に講師として、神経—筋生理学を担当するという事で医学部から理学療法学科へ赴任しました。神経—筋生理学の講義だけで週3回もあり、理学療法士を志望する学生は非常に熱心でした。理学療法学科の教員も教育熱心で、今も続けておりますが、毎週火曜日の朝8時からの抄読会があり、その後の会議では学生の成績などについていつも熱心に討議が行われていました。私は、最初は理学療法についてはほとんど知りませんでした。しかし、25年間それに参加したお陰で、少しは理学療法のトピックもわかるようになり、浅賀准教授、笠原助教、斎藤助教らと一緒に、姿勢調節や脳血管障害の実験的、臨床的研究について一緒に実験をして、理学療法関係の学会で発表するために海外に一緒に行ったり、論文を出したりした楽しい思い出がたくさんあります。

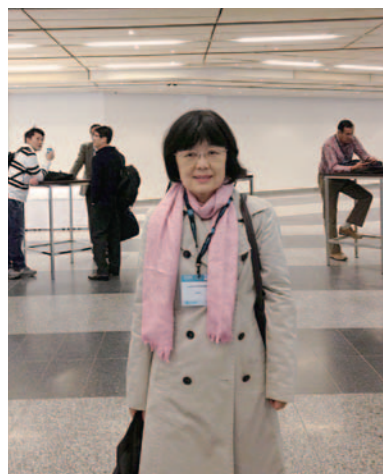
その上、私自身も5年前よりスポーツクラブに通って筋トレ、エアロバイク、トレッドミル、プラテュスならぬピラティス、すなわちリハビリテーションに励むようになりました。運動は、気分転換になりますし、シェイプアップ、アンチエイジング、また、もう一つの趣味であるピアノ演奏のための筋力の衰えを防ぐために離れられなくなっていました。ここへ来て最もよかったことの一つだと思います。

二つ目の収穫としては、仕事が忙しい、キャリアの確立、国内外の競争相手に負けたくないなどの理由でほとんどあきらめていたのですが、こちらへ来て41才で母親になれたことです。出産、育児は、仕事にはない幸福

をもたらしてくれました。夫はじめ家族の喜びもひとしおでしたが、夫は多忙で祖父母の援助も全くなく、保育園、ベビーシッター、家政婦をお願いしてやりくりしましたが、その間、教職員の皆様が暖かく見守って下さったことに感謝しております。

さて、本業の方ですが、私の研究は、医学部第二生理で眼球運動についての動物実験、また、精神科の患者さんの眼球運動を主に行っておりました。また、平成21-23年度に渡り、寄附分野にて宮本環特任准教授とともに機能的脳画像(fMRI)の研究を行うことができました。現在注目を集めている広汎性発達障害の脳機能病態を知るという目的で、特定領域、新学術領域の科学研究費、国立精神神経センターの受託研究費をいただいていた行いましたが、fMRIの研究結果の意味づけはなかなか難しいということがわかりました。初めての寄附分野開設に前研究院長の小林教授が大変ご尽力下さいました。

このように、研究も教育も幅広く、非常に楽しんで行うことができた25年間でした。好き勝手な研究が可能であったのも保健科学研究院の自由なシステムのお陰であったと思います。理解のある上司、心を割って話し合える同僚に恵まれ、心より感謝をいたしております。皆様の今後のご活躍をお祈りいたします。



ご挨拶

健康科学分野 特任教授 酒井 正春

私が北大に赴任したのは昭和最後の前年(昭和63年9月)でしたので、札幌で過ごした期間は平成の年数と同じ、24年7ヶ月となります。最初の17年間は医学部、医学研究科で研究三昧の日々を送りました。平成17年から放射線技術科学専攻に着任し、8年間お世話になりました。当初は環境も立場や求められることも以前と異なり随分と戸惑いました。しかし、放射線関連の知識や診療放射線技師のこと、医療職業人に対する教育など全く知らない私を、非常に寛容な専攻の先生方が快く迎えてくれました。立場や研究内容、バックグラウンドなどが全く違う先生たちの集まりですが、お互いを尊重し、非常に自由な環境で、本当に楽しく過ごすことが出来ました。こんなにも自由に居心地のよく過ごせた時間は保健学科に来るまでなかったかもしれません。

思い出と言いますと、やはり赴任当初のことが思い出されます。最初に命じられた重責は新入生のクラス担任で、その最初の仕事が大滝村での新入生宿泊研修でした。スケジュールを決め、バスを手配してと慣れない仕事をやりました。講義やガイダンスの時間を少し短縮し2日目は洞爺湖と有珠山の観光で楽しく親睦を深めるという計画でした。翌朝、すばらしい天気です、しかし、時間になっても手配したはずのバスが来ません。担当者が時間を間違えていたようです(Unbelievable!)。学生を待たせて交渉しました「とにかく、近くのバスかタクシー10台手配して早く迎えに来てくれ(冷汗!)」、やっとバスが来ましたが、予定の観光は出来ず有珠山で記念写真を撮り、札幌に向かうしかありませんでした。

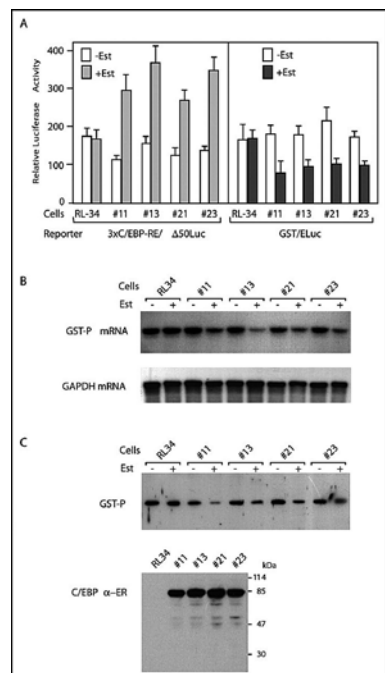


■2006年新入生宿泊研修

た。写真はその時のものです。学生たちは今、各地の職場や大学院で活躍しています。退職前には集まってくれるという話もあります(あまり当てには出来ませんが)、うれしいことです。

もう少し紙面がありそうなので研究上の思い出も記させていただきます。当時、1つの論文が厳しい査読を受け、サスペンド状態でした。昔から手がけていた腫瘍マーカー遺伝子の発現調節に関わる研究です。正常肝細胞で、ある転写因子が負に働き、この遺伝子の発現を抑制していることが示唆されましたが詰めの実験、培養細胞に因子遺伝子を入れても発現が抑制されません。理由は、この因子が細胞分化に働き、細胞増殖を止める因子だったのです。従ってこの因子の発現細胞は樹立できないというジレンマに陥りました。その頃、この因子遺伝子にステロイド受容体遺伝子をつなぎ、キメラ因子を作ると、ホルモンによってその活性のON/OFFができるという報告を見つけ、早速この遺伝子を手に入れました。保健学科での最初の夏のB204実験室、この遺伝子の導入細胞を作り、ホルモンを加え腫瘍マーカーの発現を見たところ、見事に抑制されていました。「やった!」と思える瞬間、保健学科でも十分研究できると確信した出来事でした。写真は実験で得られたFig.です。論文は無事受理され、保健学科での最初の論文となりました。

本当にお世話になりました。放射線専攻には十分な貢献が出来なくて忸怩たる思いもありますが、皆さんと仕事が出来たことを誇りに、第二の人生に向かいます。



■Ikeda H et al. (2006) *J. Biol. Chem.* 281, 6734-6741, Fig. 6

ご挨拶

創成看護学分野 教授 河原田 まり子

2004年春、医学部保健学科看護学専攻教員として着任しました。医療技術短期大学部から医学部保健学科として4年制の学部に移行した記念すべき年でした。その後、大学院修士課程そして博士後期課程が設置され、組織も現在の保健科学研究院となりました。私自身、本保健科学研究院の成長と共に充実した時を過ごさせて頂きました。この9年の歳月は走馬灯のように走りすぎていきました。教育と研究の視点から印象に残ることを振り返ってみたいと思います。

現在、大学における看護教育は保健師課程の選択制が可能になりました。また、大学の理念や方針に基づいて、学部専攻科や大学院における保健師教育課程の設置が可能となり、質の高い保健師教育を構築する時代に入りました。私は道立衛生学院で保健師養成のための教育を7年間担った経験から、本学の保健師教育を担う役割を期待されていました。母校に戻り、保健師教育課程の立ち上げにと意気込んでいたように思います。私が経験した保健師教育は、実習等の壁を乗り越え看護師免許を取得した学生が入学する1年間の保健師教育でした。最初、高校を卒業したばかりの学生と向き合った時に、あまりの若さにとまどいを感じました。しかし、そのとまどいは、学生の持つ可能性への感動に変化していきました。また、大学院では、学生の皆さんから非常に多くの刺激を受けました。学生の皆さんには未来を担う希望を感じます。後輩の皆さんの活躍を期待したいと思います。

私が看護の道に進んだのは30歳の時でした。「病気になった人に自分は何ができるのか」、「心身の健康とは何か」という問題にぶつかったからです。私にとっては人生の一大変革でしたが、それが私の研究の原点でもあります。公衆衛生看護の道を選択し、地域の人々と共に健康を守る保健師活動に従事し、病気になるつらさと予防の重要性を強く感じました。公衆衛生看護は、

誕生前から死に至るまでのすべてのライフサイクルの方々を対象にしています。そのような中で、特に関心を持ったテーマは、精神疾患を患いかつ精神障害を併せ持った方の地域生活での「生きにくさ」への支援でした。地域サポートケアシステムの構築に向けて、保健所関係職員と一体となって実践とアクションリサーチに取り組みました。本学着任後は、産業保健の重要課題の一つである職場のメンタルヘルスに取り組みました。産業保健師としての問題意識がベースになっています。働き盛りの労働者が心の健康を失っていく場面に多々遭遇し、予防策の樹立の必要性を感じていました。効果的な予防教育プログラムを開発し、そのエビデンスを積み上げたいと取り組み、2009年には国際地域看護学会賞をいただきました。

退職後は、札幌市立大学看護学部(2012年度から博士後期課程を設立)で人々の健康に貢献できるような教育・研究に取り組んでいきたいと思っています。これまで、暖かく励まし支えて下さった本学の皆様に心より感謝申し上げます。



ご挨拶

機能回復学分野 教授 武田 直樹



平成13年(2001年)12月に北海道大学医療技術短期大学部理学療法学科に赴任し、その後北海道大学医学部保健学科、大学院保健科学研究院と11年と少しにわたりお世話になりました。月並みですが、あっという間のできごとのように感じます。その間福島教授、宮本教授、山中教授をはじめ機能回復学分野の諸先生、保健科学研究院の諸先生からご厚情を賜り、深く感謝いたしております。定年には少し早いのですが、次のステージにむけてスタートをきりたいと思っております。

昭和56年に北海道大学医学部を卒業し、整形外科(松野誠夫教授)に入局しました。初期研修を終了後は脊椎外科医を目指し金田清志先生の脊柱班に入れていただきました。平成元年からは骨軟部腫瘍をレパトリーに加え、悪性脊椎腫瘍に対する脊椎全摘術などの開発に携わりました。平成4年には北大病院手術部に移り、手術患者様の安全な管理や感染対策などに従事しました。平成10年に旭川医大整形外科(松野丈夫教授)の講師として赴任し、腫瘍グループを立ち上げ、同大学で以前より行われていた脊柱後弯症の研究にも関心を深めました。3年8か月後、飯坂英雄教授の後任として北海道大学医療技術短期大学部に戻ってまいりました。臨床では転移性骨腫瘍の治療に携わる機会が

多く、より低侵襲で効果的な治療法の確立を目指しておりました。平成21年には、産学連携事業のプロである佐藤孝一教授と共に北大病院に地域健康社会寄附研究部門を立ち上げ、医療と企業の橋渡し役を試み、また地域に医療情報を発信することにより健康維持・疾病予防の啓発を行い医者が病院の外へ出ることの必要性も感じました。運動器の変性性障害に対する理学療法では、その限界も考えあわせると、より早期にあるいは予防の時点から理学療法がかかわっていくことがより有効な治療効果に結びつくのではないかと考えています。その考えが社会医療法人北斗の鎌田一理事長と一致し、平成23年には保健科学研究院に寄附分野として北斗関節機能障害予防学分野を設置することができました。そこでは障害の早期発見のための画像モダリティの運用や早期治療のための膝教室の開設、エビデンスのある理学療法の開発に取り組んでまいりました。これは次の任地である帯広で続けていきたいと思っておりますし、そこでもいままでに蓄えてきたものすべてを出して地域医療に貢献したいと思っております。

最後になりましたが、保健科学研究院・保健科学院の皆様のご健勝をお祈り申し上げます。どうもありがとうございました。



平成24年10月1日より北海道大学大学院保健科学研究院基盤看護学分野に赴任いたしました。以下、私の自己紹介として経歴を述べさせていただきます。

■大学卒業後の臨床経験について

私は、平成14年に札幌医科大学保健医療学部看護学科を卒業し、その後、市立札幌病院で約5年間病棟看護師として勤務しておりました。学生の時に祖父ががんを患ったことに影響を受け、在学中はがん看護に関心を持ち、卒業研究はがん看護に関連するものに取り組みました。就職後もがん看護を実践できる病棟に配属希望を出し、放射線科病棟にて勤務しておりました。患者さん達は、厳しい闘病生活を送っていたにもかかわらず、新人でいたらない私に優しい言葉や励ましの言葉をかけてくださり、それは、今でも看護職として働く私の支えとなっていると思います。

その後、循環器科に異動となりました。病気の特性が今までと全く異なっていたこともあり、医師から期待される看護師としての能力、患者さんから期待されるケア内容が一変し、非常に困惑しました。循環器科では約2年間勤務しました。不本意な異動ではありましたが、循環器系の疾患の勉強をする機会となり、知識・技術の面で非常に成長できました。

市立札幌病院退職後は、札幌市内の民間の病院に

勤務しておりました。そこで、公立の病院と組織運営や管理方法の違いを体験し、また、医療の受け手の新たな側面を見ることができました。

■研究活動について

病院勤務をしながら、平成23年3月に北海道大学大学院保健科学院修士課程を修了し、平成24年3月に小樽商科大学大学院商学研究科アントレプレナーシップ専攻(ビジネススクール)を修了しました。北大の修士課程では、看護管理学を専攻し、自分が看護師として経験した病院内異動が、看護師のキャリア発達においてどのような意味があるかについて修士論文を書きました。

論文に取り組む中で、看護管理で活用されている理論の多くは、経営学の理論を参考にしていることを知り、もっと経営の視点を深めたいとビジネススクールへの進学を決めました。入学後は見ることも聞くことが初めてのことばかりで、私(多くの医療職者もそうだと思います)の常識や価値観は、世間と異なっていたことを実感しました。どのような組織においても経営感覚が求められている時代です。医療職や公共団体であっても、社会全体の営みと流れを踏まえた活動の必要性を感じました。

現在、取り組んでいる研究の一つは、重度認知症高齢患者さんを対象としたものです。入院後の過度の安静により、高齢患者さんの機能低下を目の当たりにした経験に起因しています。その他にも興味は幅広くあり、自分の研究の軸を定めきれず、試行錯誤の日々を送っております。

この度、教員となり、今までと異なる立場で医療と関わることとなりましたが、学生さん達と一緒に学び成長していきたいと考えております。何卒よろしくお願いたします。

健康科学分野 人類生態学研究室

健康科学分野 准教授 山内 太郎

2008年4月、大学院修士課程開設と同時に人類生態学研究室を立ち上げました。教員1名、院生6名(修士課程4名、博士課程2名)そして大学院研究生、卒業研究の学部4年生若干名からなる小さな研究室です。アジア、オセアニア、アフリカの地域社会でフィールドワークを行い、地域住民のライフスタイルと健康について調査・研究しています。

伝統社会や途上国の農村・漁村部においては、栄養欠乏、子どもの成長不良などが問題となっています。しかし、一方で都市部においては肥満や生活習慣病が急速に顕在化しています。途上国が抱える矛盾した健康問題に対して、現地フィールドワークによるボトムアップの手法を用いて問題点の抽出、現状分析、問題解決・緩和方策の策定を目指しています。

海外調査歴は20年を数え、フィールドは10ヶ国・地域を超えています。近年はアジア(インドネシア)、オセアニア(ソロモン諸島、パプアニューギニア)、アフリカ(ザンビア、カメルーン)の5ヶ国において、国内外の様々な研究機関と協力してプロジェクトを行っています。主なものを紹介します。

1) 狩猟採集民のライフスタイルと健康(カメルーン)

現在、世界にごく僅かしか残っていない狩猟採集社会のライフスタイルと健康を調査しています。自然と共生して暮らしている人々から多くのことを学び、現代そして将来の人類の健康に寄与することを企図しています。

2) サブサハラアフリカにおける気候変動と地域住民の栄養と健康(ザンビア)

土壌学、農学、経済学、地理学、気象学、文化人類学など異分野の研究者とともに、気候変動が地域社会・住民に及ぼす影響について、栄養状態、成長の側面から調査研究を行っています。2012年4月、首都に北大

の海外拠点(ルサカ・オフィス)が開設されました。ザンビアは北大の国際交流における拠点の一つです。

3) 民族紛争後の社会復興期における地域住民の健康、マラリア罹患(ソロモン諸島)

太平洋の島嶼国も急速な経済発展、近代化の渦中にあります。2000年に首都で起きた民族紛争によってその流れが中断され、以前の自給自足的な農耕・漁労へ戻りました。治安快復後は再び近代化が加速的に進行しています。紛争前後のデータを比較することにより、地域住民への健康影響を明らかにします。

4) 農村と都市の学童の体格とフィットネス(インドネシア)

経済発展にともない急激に都市化が進行する中で都市の子どもたちは肥満化し、体力水準も低いことが顕在化しています。先進国よりも深刻な状況にある途上国都市部の子どもの肥満・体力低下の予防・緩和方策を現地の研究者とともに考えています。中部ジャワ州 Diponegoro 大学との10年におよぶ共同研究が実り、2012年12月に部局間協定の締結となりました。

海外フィールド体験は、物の見方、人生観を変え得る大きなインパクトがあります。若者の内向き志向が懸念されていますが、北大の基本理念には「フロンティア精神」と「国際性の涵養」が掲げられています。大学院修了者は、病院や行政(保健師)、一般企業、博士課程進学、大学教員(社会人院生)と様々な分野で活躍しています。当研究室の使命は、異文化でのフィールドワークの貴重な経験を糧として、多様な分野へ人材を輩出すること、そして地域社会で最も脆弱な存在である子ども達の安全と健康と幸福に貢献することです。

<研究室ホームページ:

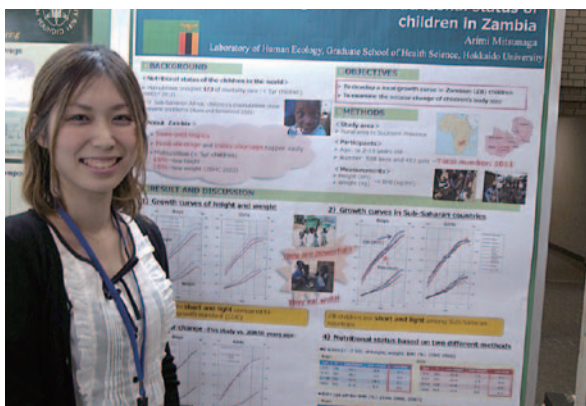
<http://www35.atwiki.jp/smilelab/>>



■写真:世界の子どもたち(左から、ソロモン諸島、カメルーン、インドネシア)

SW2012学生研究ポスターコンテスト受賞報告

保健科学コース 修士課程1年 満永 有美



第4回北海道大学サステナビリティ学生研究ポスターコンテストにおいて、「健やかに人間らしく生きる」の分野にエントリーしました。「Assessment of the growth and nutritional status of children in Zambia」と題して、アフリカのザンビア共和国に居住する子どもの成長と栄養状態についてプレゼンテーションを行い、総長賞(最優秀賞)をいただくことができました。ザンビアでお世話になった方々、指導教員の山内先生をはじめ

人類生態学研究室の皆様深く感謝申し上げます。

昨年夏に1ヶ月ほどザンビアの農村で調査をして一番心に残ったことは、現地の人はみな精神的に豊かだったということです。一般的には“アフリカ=貧困”というイメージが強いですが、もちろん先進国のように物資は整っていませんが、大人も子ども皆、毎日を心から楽しく過ごしていました。私はそのような姿に魅了されると同時に、現地に行かなければわからないことがあるということに初めて気付かされました。詳細な身体計測によって、ザンビア農村部の子どもたちは国際基準と比べて低身長、低体重であるものの栄養状態は良好であることが分かりました。

発表を通じて伝えたかったことは、ザンビアの子どもたちについて一人でも多くの方に正しく認識してもらいたい、一方的なイメージだけで考えてほしくないという思いでした。それが彼らに対するささやかな恩返しになると考えています。つたない発表を評価していただき、このような名誉ある賞を受賞できて本当に嬉しいです。受賞を励みに、今後も学業、研究にしっかり取り組んでいきます。

SW2012学生研究ポスターコンテスト受賞報告

看護学コース 修士課程2年 齋藤 彩乃

2012年10月16日に第4回サステナビリティ学生研究ポスターコンテストにおきまして、4分野のうち、「健やかに人間らしく生きる(Human well-being)」の課題分野で参加し、優秀賞をいただくことができました。私は、“The Difference Between Self-medication and Medical Consultation for the Elderly”として、高齢者が病院に行かなくてはいけないと思う時はどのような場合かという内容について発表しました。これは、適正受診や市販薬の適切な使用を考える上で、非常に重要な問題です。

このコンテストは、他分野の方との交流ができる数少ない機会であり、自分の研究意義やその内容を、いかにわかりやすく伝えられるかを問われるものでもあります。審査員の方からは、違う視点からの意見を頂けるので、研究の社会的な位置づけや社会貢献について見直すことができました。

今後の研究活動や学会発表に向けて、この経験を生かすとともに、さらなる発展を目指して精進したいと思います。

最後にはなりますが、指導教員である佐伯和子先生をはじめとする研究室の皆様、この場を借りまして厚く御礼申し上げます。



国際交流協定締結の報告

インドネシア Diponegoro大学および Dr. Kariadi病院と部局間交流協定を締結

保健科学研究院 国際交流専門部会長 山内 太郎

2012年12月4日、伊達研究院長とインドネシア共和国中部ジャワ州の州都スマラン市に赴き、Diponegoro大学医学部および大学附属Dr. Kariadi病院と部局間交流協定を結びました。

スマラン市は古都ジョグジャカルタで知られる中部ジャワ州の州都です。人口は150万人を超え、ジャカルタ、スラバヤ、メダン、バンドンと並ぶ五大都市と称されます。Diponegoro大学は1957年創立11学部を擁する総合大学です。イギリスの高等教育情報機関(Quacquarelli Symonds)による大学ランキングではインドネシアで第8位です(2012年)。医学部は医学科、看護学科、栄養学科を擁しています。また、独立した公衆衛生学部もあります。



一方、Dr. Kariadi病院はオランダ領であった1925年に創立され(1942年から1945年の日本統治時代は「中央市民病院」と改称)、独立を経て1964年に現在の名称となりました。大学の附属病院ですが独立した研究教育機関です。放射線、リハビリテーション、検査なども充実した基幹総合病院です。

近年、経済発展がめざましく、日本とのつながりも深いASEAN諸国の研究機関と協定を結んだことは、長期的視点において意義が大きいと考えます。今後、密接な交流を通じて、研究・教育の両面において双方に有益なパートナーシップを構築していきたいと思えます。



国際交流協定締結の報告

台北医学大学と部局間交流協定を締結

保健科学研究院 研究院長 伊達 広行

2012年12月21日(金)台北市にある台北医学大学において、台北医学大学と本学との部局間協定に関する調印式が行われました。この協定は、台北医学大学の医学部、看護学部、公衆衛生・栄養学部、医療技術学部の4部局と、北海道大学の大学院医学研究科・医学部と大学院保健科学の2部局との間で結ばれるものです。台北医学大学のTzeng医学部長のスピーチの後、玉木医学部長・医学研究科長と保健科学院長が、スライドを用いて、



それぞれ医学科・医学研究科と保健学科・保健科学の教育研究活動について紹介しました。台北医学大学からは、上記4学部の学部長を含む10名以上の関係教員・職員の出席があり、調印に続き、記念品交換が行われました。この協定締結により、両大学の部局の学生ならびに研究者の交換研修や共同研究プロジェクトの遂行など、積極的な学術交流が期待されます。



独立行政法人放射線医学総合研究所と大学院連携協定を締結

健康科学分野 教授 小笠原 克彦 (連携分野)重粒子医科学分野・客員教授 安藤 裕



昨年12月1日に北海道大学大学院保健科学院と放射線医学総合研究所の間において連携分野協定が締結され、4月1日付で保健科学院で最初の連携分野「重粒子医科学分野」が設置されます。この連携協定は、「教育活動、研究活動、社会貢献活動など、相互協力が可能な各分野において、双方が互恵の精神に基づき連携および研究教育協力を推進し、その成果を促進することにより、我が国の放射線科学の発展・継承に寄与すること」を目的としています。

この連携分野の特徴は、保健科学研究院と最先端の放射線科学研究を行っている放射線医学総合研究所との共同研究・研究交流が推進されるだけでなく、人材育成の推進の一環として、北海道大学大学院保健科学院博士後期課程の大学院生が放射線医学総合研究所にて研究指導を受けることが可能となります。

今回、協定を結びました放射線医学総合研究所は、1957年に創設された放射線と人々の健康に関わる研究開発に取り組む「国内唯一」の研究機関と言っても過言ではありません。千葉市稲毛区にある放射線医学総合研究所には、重粒子医科学センター、分子イメージング研究センター、放射線防護研究センター、緊急被ばく医療研究センター等で構成されています。今回の連携の核となる重粒子医科学センターは、国内で唯一の放射線治療専門病院で国内第1位の重粒子線治療の実績を誇る重粒子医科学センター病院を中心に、融合治療診断研究プログラム、次世代重粒子治療研究プログラム、先端粒子線生物研究プログラム、国際重粒子医科学研究プログラムを有しています。2010年には国際原子力機関(IAEA)の協働セン

ターに認定されるなど、国際的にも評価の高い研究機関です。

連携分野の客員教員として、放射線医学総合研究所重粒子医科学センター病院・病院長の安藤裕先生、重粒子線医科学センター融合治療診断研究プログラムリーダーの辻比呂志先生が客員教授として着任されます。両先生は、放射線治療専門医としての豊富な臨床経験と研究実績をお持ちであり、大学院保健科学院博士後期課程・保健科学コース先進医療科学科目群の主任指導教員・副指導教員として、以下のテーマを研究指導して頂きます。

安藤客員教授

医療情報の標準化に関する研究

臓器Registrationの画像処理および放射線治療分布等に関する研究

辻客員教授

粒子線治療の臨床効果に関する研究

放射線治療における先進技術に関する研究

また、授業科目として重粒子医科学特講を放射線医学総合研究所にて開講して頂く予定です。

放射線医学総合研究所での様々な共同研究、連携分野「重粒子医科学分野」での研究指導を通じた博士号取得を希望される方がいらっしゃいましたら、是非ご連絡ください。何卒よろしく願いいたします。



ひらめき☆ときめきサイエンス～ようこそ大学の研究室へ～ KAKENHI「ようこそ不思議な細菌の世界へ～身の周りの細菌を見てふやして感じてみよう～」

病態解析学分野 教授 山口 博之

保健科学研究院では、12月9日(日)、高校生を対象とした日本学術振興会主催実体験プログラム「ようこそ不思議な細菌の世界へ～身の周りの細菌を見てふやして感じてみよう～」(実施代表者 山口博之教授)を開催しました。

科学に興味を持ちその研究領域に足を踏み入れる学生数が極めて少なくなってきました。これは科学の将来にとって由々しき事態であり、抜本的な解決策を速急に見いださねばなりません。そこで、細菌学を通して科学への興味を次の世代を担う若者にぜひ持ってもらいたいという強い願いから本研究院ではこのプログラムを継続的に実施しており今回で5回目の開催となりました。

当日のプログラムには高校生18名、保護者・引率者など8名の計26名の参加があり大変賑やかな実習となりました。プログラムは参加者の掌や口の中に常在する細菌を培養しグラム染色を通して見てみるという極めて単純なものです。その一方で、参加者の口の中や掌の細菌を見るためには少なくとも1日以上以上の培養時間が必要であり、プログラムに納めるための工夫が必要です。そこで細菌培養用の平板培地と掌型培地を参加者に送りサンプリングしてもらったものを送り返してもらい、実施日には参加者自身が培地上に自分の体から培養された細菌を実際に観察できるようにしました。また参加者の疑問点や質問に対して誠意を持って対応できるように参加者3～4名ごとに大学院生や学部生(TA)を1名配置したことで、TAを通して実験内容の細部に渡りフォローするとともに研究室での具体

的な研究活動等の話題を通して相方向型のやり取りが可能になりリラックスした環境を作り、参加者と実施者との円滑なコミュニケーションが実現しました。また今年のプログラムは午前中から開始し、昼食も参加者と実施者が一緒にとり、参加者と実施者の間での会話がより弾むよう工夫しました。さらに、参加者自ら撮影した顕微鏡イメージをUSBに保存し、プレゼントしました。

菌を直接顕微鏡で眺めて驚く参加者の姿を見て嬉しく思うとともに、更に感動を与えられるプログラムに進化させるための強い意欲が湧いてきたのも事実です。またOHPを用いて体験して内容について参加者に発表してもらい、当日の感動体験を心に刻んでもらいました。最後に、高校生の参加者に伊達研究院長より「未来博士号」が授与され、プログラムを無事終了しました。

東京など大都市とは異なり、地方都市でこのようなプログラムへの大勢の高校生の動員は困難を極めます。そこで北海道大学周辺の高校の先生との連携を執るようになり、本年度はさらにそれを強化しました。そのかいあって参加者数は定員20名をコンスタントに維持しています。今後は、高校への出前講演などもプログラムに加え、高校生の積極的な参加をさらに促進できればと思っています。さまざまな科学ジャンルが交差する保健科学だからこそ可能なオリジナリティーの高い若い世代の知的好奇心を存分に惹起しうる魅力的な科学融合プログラムを継続して実施していきます。



平成24年度(第2回)北海道大学医学部保健学科 卒業研究優秀賞表彰式を挙

平成25年1月24日(木)、保健学科会議室において「北海道大学医学部保健学科卒業研究優秀賞」表彰式が行われ、保健学科の教員が列席のもと、伊達保健学科長から被表彰者15名に、賞状および記念品が贈呈されました。

この表彰は、医学部保健学科4年次に在籍する学生で、保健科学における新しい研究課題を積極的に開拓し、優れた卒業研究を行った個人・グループへ授与されるものです。

このたび下記の方々が表彰を受けられました。

専攻	氏名
看護学専攻	池田 雪花 さん
	ガンブリグ オチゲレル さん
	小林 甫 さん
	山田 美季 さん
	蔵満 美奈 さん
	木村 宣哉 さん
	藤田 直人 さん
	伊藤 香織 さん
	角田 沙織 さん
放射線技術科学専攻	松谷 悠佑 さん
	寺本 大翼 さん
検査技術科学専攻	大塚 亮 さん
	嶋田 翔太 さん
理学療法学専攻	釘本 真幸 さん
作業療法学専攻	安井 勇輔 さん



■記念写真

研究助成採択状況(24年8月～24年12月)

所属・氏名	財団等名称	種 目	題 目
博士後期課程1年 長堀 智香子	ユニベール財団	「健やかでこころ豊かな社会をめざして」 研究助成	コミュニティで作る子どもの食事環境～アフリカ・カメルーン共和国の子どもの離乳食と栄養～

受賞状況(24年8月～24年12月)

所属・氏名	受賞・表彰名称等	受賞論文名・研究題目・受賞理由等
医用生理工学分野 教授 加藤 千恵次	American Society of Nuclear Cardiology Award for the Best Technical Imaging Paper	Quantification of regional myocardial blood flow estimation with three-dimensional dynamic rubidium-82 PET and modified spillover correction model. Katoh C, Yoshinaga K, Klein R, Kasai K, Tomiyama Y, Manabe O, Naya M, Sakakibara M, Tsutsui H, deKemp RA, Tamaki N. J Nucl Cardiol. 2012 Aug;19(4):763-74.
生活機能学分野 教授 村田 和香 修士課程2年 東野 玄 修士課程1年 庄子 翼 研究生 雲 杉	第43回北海道作業療法学会 優秀演題賞	高齢者に対する将来展望プログラムの予備的研究
博士後期課程1年 田中 将登	Wild Fire and Carbon Management in Peat-Forest Best Poster Awards	Humic acid induces the endothelial NO synthase activation via Hsp90 upregulation in human umbilical vein endothelial cells
修士課程2年 泉井 宏介	日本放射線技術学会北海道部会学術大会 第68回秋季大会 優秀研究賞	修復効果を含む新しい細胞生存率モデルの検討
修士課程1年 佐々木 翔平	日本放射線技術学会 北海道部会学術大会第68回秋季大会 優秀研究賞	放射線治療業務を対象としたリスク要因のベイジアンネットワーク分析
修士課程1年 満永 有美	第4回 北海道大学サステナビリティ 学生研究ポスターコンテスト 最優秀賞	Assessment of the growth and nutritional status of children in Zambia
修士課程2年 齋藤 彩乃	第4回 北海道大学サステナビリティ 学生研究ポスターコンテスト 優秀賞	The Difference Between Self-medication and Medical Consultation for the Elderly

保健科学研究院研究助成制度対象者(平成24年9月～平成25年1月)

分野	職名	氏名	備考
健康科学	准教授	山内 太郎	
医用生体理工学	教授	伊達 広行	
病態解析学	教授	石津 明洋	3編 内2編20%以内 ※1
病態解析学	教授	山口 博之	
機能回復学	教授	武田 直樹	
健康科学	教授	千葉 仁志	2編 内1編20%以内 ※1
機能回復学	教授	山中 正紀	
病態解析学	教授	森山 隆則	
医用生体理工学	教授	西岡 健	
健康科学分野	助教	神 繁樹	

【研究助成制度】

- 対象：(1) 英文原著論文(査読有、IF有、first author)を執筆した教員
 (2) 英文原著論文(査読有、IF有)のcorresponding authorとなった教員
 (ただし、(1)に該当する論文のcorresponding authorとなった教員は除く)

助成の方法：論文1編につき10万円の研究費を対象教員に配分

※1 掲載雑誌のランキングが当該カテゴリーにおいて上位20%以内は10万円を追加配分

小樽商科大学大学院商学研究科アントレプレナーシップ専攻 「大学院連携によるMBA特別コース」入学志願者の決定

平成24年12月20日(木)開催の保健科学院教授会において、平成25年度の小樽商科大学大学院商学研究科アントレプレナーシップ専攻「大学院連携によるMBA特別コース」入学志願者として、下記の2名が決定しました。

所属学科目	氏名	指導教員
健康科学	桑原 智美	小笠原克彦
健康科学	佐々木 翔平	小笠原克彦

人 事 異 動

平成24年9月30日

(辞 職)

渡辺 玲奈 基盤看護学分野助教

平成24年10月1日

(採 用)

吉田 祐子 基盤看護学分野助教

平成24年12月31日

(辞 職)

河原田まり子 創成看護学分野教授



広報誌の名称 「プラテュス」の由来

保健科学研究院の玄関前には、大きな二本のプラタナスの樹があります。古代ギリシャの医者ヒポクラテスは、プラタナスの木陰で弟子たちに医学を説いたそうです。大きな広い葉をもつプラタナスは、ギリシャ語で「広い」を意味する platys(プラテュス、ギリシャ語では「πλατύς」と記す)に、その名が由来するとされています。本研究院が幅広い分野の専門家の集まりであることから、このプラタナスの語源になぞらえて「プラテュス」と命名しました。

広報室 (編集委員)

齋藤 健(広報室長)
溝部 佳代
加藤千恵次
政氏 伸夫
高橋 光彦
境 信哉
山内 太郎
恵 淑萍
武藤 幹夫(事務)

発 行 北海道大学大学院保健科学研究院広報室
〒060-0812 札幌市北区北12条西5丁目
連絡先 庶務担当
電 話 011-706-3315
E-mail shomu@hs.hokudai.ac.jp
URL <http://www.hs.hokudai.ac.jp>